

啓示宗教における権威主義的構造^①

立花 希 一

一、権威一般の特徴

啓示宗教における権威主義的構造を考察する前に、若干の識者による権威に関する考察を踏まえながら権威一般の特徴を指摘しておきたい。

(1) 3項関係としての権威

ボヘンスキーによれば、^②権威は関係概念であり、しかも権威の担い手と受け手と領域とによる3項関係であるという。権威の担い手(必ずしも人間とは限らない)だけが存在したとしても、権威を受け容れたり、服従したりする受け手が存在しなければ権威が成立しえないということは明白であろう。また領域とは権威の及ぶ範囲のことである。

(2) 事実的権威と法的権威

権威を事実的権威と法的権威に分類することがよく行われる。^③

事実的権威はある権威を受け手が事実として受け容れているという事実だけを述べるものであり、法的権威は受け手の意思にかかわらず、強制力をもって受け容れさせることができ、また受け容れさせることが正当であるというものである。後者の例としては、警察が捜査令状をもって家宅搜索する際、当事者の意思に関わりなく強制的に執行されるというような場合である。この場合、その権威を当事者が事実として受容していないときですら成立することからもわかるように、事実的権威と法的権威は異なる概念である。

(3) 権威と権威主義

私は啓示宗教にみられる権威を権威主義として捉え、単なる事実的権威とは区別したいと思う。権威主義とは、人は何らかの権威を受け容れる方がいいとか、あるいはそうすべきであるという主張を意味する。すなわち、権威主義には「当為」が含まれているのである。権威主義とは、単なる事実的権威の主張とは異なる規範的権威の主張であるといえよう。また、権威主義には強制力を伴うものとしての法的権威もその内に含まれる。以上のような点から啓示宗教における権威主義的構造をみることにしよう。

二、啓示宗教における権威主義的構造

(1) 啓示宗教と権威主義

今日、啓示宗教として分類される宗教には、キリスト教、ユダ

ヤ教、イスラム教が挙げられるが、これらはすべて古代イスラエルの宗教にその根をもつものである。『旧約聖書』によれば、それはアブラハムが神の啓示を受けたことから始まる（「創世記」12章）。神が一方的にアブラハムを選び、神の計画、意思を告げる。アブラハムはその言葉に従い、一族を連れて故郷の地を離れ、約束の地へと出発する。ここに権威主義的構造を読み取ることができよう。究極的には神が絶対的な権威の担い手であるが、アブラハムと一族との関係でいえば、アブラハムが権威の担い手であり、かれを取り巻く一族が権威の受け手である。この関係は固定的かつ不変的である。権威の受け手が、自らの（能）力によってアブラハムのような権威の担い手にはけっしてなることはできないからである。しかもそこには事実的権威ばかりではなく、規範的権威も見受けられるのであり、明白な権威主義があるといつてよいであろう。神が自らの意思を、万人にはなく、一握りの選ばれた人間にし、か明かさない啓示宗教は、必然的に権威主義にならざるをえないといえるであろう。啓示宗教は、その構造自体からして権威主義になるのである。この権威主義的構造は同様にモーセ、預言者へと引き継がれ（生殺与奪の権など法的権威の最も強大なのはモーセである。「出エジプト記」32章参照）、さらにはイエスやムハンマドなどへと継承されていくことになる。

(2) 真の預言者と偽の預言者

『旧約聖書』には多くの預言者が登場し、その中には偽の預言者

も交じっている。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教においては真の預言者と偽の預言者の区別はそれぞれにとって明らかなのである——少なくとも『旧約聖書』で預言者とされているのが、真の預言者ということになるのだろう——が、その判断は事後的であって、預言者が活動していた当時においてはそれほど明らかなことではないし(例えば、「エレミヤ書」28章のエレミヤとハナンヤの民衆の前での対決を参照)、『旧約聖書』の随所で述べられている、真の預言者と偽の預言者との判定基準からしてもそれほど明確ではない。結論を述べると、預言の形式や内容といった客観的な外的規準によつては判定不可能であり、ある歴史的時点において神の意図の真の洞察をもつた預言者によつてのみ主観的に判断されるほかはなく、しかも、彼自身確信がもてないときもあるということになる。⁽¹⁾ 予言成就以前にはもちろんのこと、予言成就以後においても、その後の予言がつねに成功し続けるという保証は事前にはまったくないので、権威の受け手である普通の人間には真の預言者か偽の預言者かを判断する手だてはなく、結局はそれを信じて、受け容れるしか道が残されていないし、しかもそうすべきであるということになる(今日のような信教の自由や政教分離が認められている社会においては、不信仰の自由もあるけれども、かつては不信仰の自由という余地はなかったのである)。こうしてその構造上、権威主義的にならざるをえない啓示宗教においては、啓示を受ける者と受けけない者、信仰者と不信仰

者、あるいは内と外(民族、教団などにおける)という二分法や、人間同士の間での不平等が必然的に生じてしまうといえるのではなからうか。⁽⁵⁾

(1) 1995年3月20日、地下鉄サリン事件が発生した。この事件は日本における戦後最悪の犯罪といつてよいであろう。戦争においてすら禁止されている毒ガス兵器サリンが地下鉄にまかれ、無差別殺人が引き起こされたからである。この事件は国際的にも大きな衝撃を与えた。もし今後このような事件が世界で起きるとしたら、この事件がまさに新たなテロ事件の発端であったとして、歴史上に悪しき名を残すことになることは間違いない。今後このような事件が二度と起こらないことを祈るばかりである。この事件は藤原彰晃を教祖とするオウム真理教の組織的犯行であるとして、教祖以下多くの幹部が逮捕されている。1995年5月26日現在、まだ刑が確定してはほ問違いないようである。筆者は事件発生以来、どうしてこのような犯罪が起きてしまったのかということについて考え込まざるをえなかった。以下の考察はこの事件とは直接には関わりがないかもしれないが、このような考察をしようと思うにいたった動機には少なからずなっていることをお断りしておきたい。

(2) ポヘンスキー『権威の構造』公論社、1977年、13—41頁。

(3) R. S. Peters, Authority, *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary*, vol.32, 1958, pp.208-9.

(4) 事後的な判定規準としては、未来についての予言に失敗するものは偽の預言者として排除されるというものがある(「申命記」18章22)が、ここで興味深いのは、予言の成功だけでは真の預言者の資

格として不十分（「申命記」13章1、3）だということである。さらに、酔っ払い（「イザヤ書」28章7）、姦通（「エレミヤ書」23章14）、金銭の受領（「ミカ書」3章11）などが、偽の預言者であることの規準として挙げられている。ちなみに麻原容疑者の場合、この外的規準だけからしても偽の預言者だということになるだろう。予言成就以前の判定規準としては、神の言葉を忠実に語る（「エレミヤ書」23章28）といった抽象的で、内面的かつ主観的な規準しか述べられていない。しかも、神が預言者を惑わすこともある（「エゼキエル書」14章9）というのである。

(5) K・R・ポパー（1902-1994）は、哲学の始まりであるミレトス学派に注目し、タレスは自説や自分自身を権威とすることなく、弟子たちに批判を許容、奨励したとして、そこに批判主義的、反権威主義的伝統をみている。もしこの考察が正しいとするならば、啓示宗教とは対照的に、哲学は権威主義とは無縁であるということになるだろう。Karl R. Popper, *Conjectures and Refutations*, Routledge & Kegan, London, 1969, pp.136-53.

ところで、構造上、権威主義にならざるをえない啓示宗教にはその解毒剤として、「神格化（deification）」の否定という側面がある。すなわち、唯一の神以外の一切（自然、人間、人間の創った理論や制度などを含む）を神格化、絶対化し、権威とすることに對して、批判的かつ否定的であるという点である。この側面を欠くオウム真理教はこの解毒剤すら持ち合わせておらず、教主の神格化、絶対化が生じ、教主の指令に対する無批判的、盲目的服従が生まれ、その結果、無制約の歯止め効かない犯行が重ねられてしまったのではなかろうか。

註5に対する註 神格化の問題については、秋田支部大会におけるこの研究発表後の質疑応答の中で、非常に示唆に富む意見をお伺

いすることができた。一神教では神格化の否定という側面がある一方で、人間理性の神格化に対しても一定の留保があるが、しかし、それは超合理になるとしても、反合理にはならないのではないかと、仏教には超越的で人格的な神はいないが、ダルマ（法）が神格化を防ぐ役割を果たしているのではないかと、一神教の場合の神格化の問題と、多神教にみられるような、自然や人間と連続的な関係にある神観をもつ宗教における神格化の問題とはきちんと分けて考えるべきではないかなどの意見であった。この場をお借りしてお礼を申しあげたい。なお、この神格化の問題についてはさらに考察を進め、別の機会に論じることができるようになればと思う次第である。

（たちばな・きいち、批判的合理主義と信仰、

秋田大学教授）